



知能検査の話 その2

夏休み前の
最後の号です。



知能検査は、子どもの知的能力や発達特性に関して、一定の客観性をもって情報を提供してくれる有用なツールですが、一つの検査では分からないことも多いのが実際です。

WISC-IVでは分からないことについて、前述の大六先生は次のようにまとめています。

① 知能以外は測定できません。

- ・性格特性、行動特性 ・創造性 ・感情、感情の自己調整（自己や他者の感情理解）
- ・社会性、社会的認知、対人能力、コミュニケーションスキル（社会的知識は分かる）
- ・運動能力（不器用さ、姿勢など） ・問題行動の直接の原因

これらのうち社会性に関することは、ASD(自閉スペクトラム症)の診断基準に含まれていますが、WISCは診断を目的に実施するものではありません（他の発達障がいも同様）。

診断は医師が、診断基準の各項目に状態像を照らして行います。前号にも記しましたが、WISCは、つまりき(問題、主訴)の能力的な原因と対策を知るために用いられます。

② 知能の中にも測定できない領域があります。

- ・読み書きの能力、つまりきの原因
（言葉を音に分解する能力や長期記憶は測定不能。ワーキングメモリーは測定可能）
- ・リスニング能力<聴覚処理>（WISC-IVでは主に言葉の表現力を測定） ・文法
- ・算数の基礎（数量の知識：繰り上がり、繰り下がり、九九など）

これら学力に直結する能力は、日ごろの学習活動の様子や学力テストなどを通して、数値化はされなくても、実態は把握していると思います。理想は、各々に必要な検査をいくつか組合せて実施することですが、多くの時間と経費を要し、対応には限度もあります。

【参考1】 教育センターでは、知能検査を補完するため、短時間で実施可能な、語彙の獲得状況を調べるための「絵画語彙発達検査」と、社会性の発達状況を調べる質問紙「S-M社会生活能力検査」（保護者が回答）などを実施しています。

保護者へのWISC-IVの結果説明で提示する（渡す）資料は、折れ線グラフの書かれたA4判資料1枚です。この資料を保護者に見せてもらい、説明を受けた内容を聞いたり、学校から教育センターに連絡して直接説明を聞いたりするには保護者の了解が必要です。

担任から保護者に検査実施を促す際は、校内支援委員会における検討、校長の決定を経ることに加えて、保護者とフランクな関係が築かれていることが前提となります。

また、結果を聞いても、「そうだったのか」「やっぱりそうか」と受け止めるだけで活用されないのでは、子どもや保護者に負担をかけてまで行う意味が薄れてしまいます。検査結果を知ることはゴールではなく、新たなスタートです。検査を勧めた教師(学校)側の責務として、より良い指導や体制づくりに生かし、それを保護者に説明することが大切です。

【参考2】 知能指数(IQ)の算出法 田中ビネーVでは、各年齢級の問題の回答状況から精神年齢を求め、生活年齢(実年齢)と対比してIQを算出(13歳までに適用)。両者が一致の場合、IQ=100。

WISC-IVは、同じ年齢段階の母集団（標準偏差15の正規分布）の中の位置に基づいてIQ及び指標得点を算出(偏差知能指数)。母集団の平均値と一致の場合、IQ及び指標得点=100。

±1標準偏差（85～115）に全体の68%、
±2標準偏差（70～130）に全体の95%が含まれる。

担当 学校生活適応支援アドバイザー（飯山・大瀧）
TEL 639-4392